弘前城かわら版

Vol.12［令和7年2月3日］

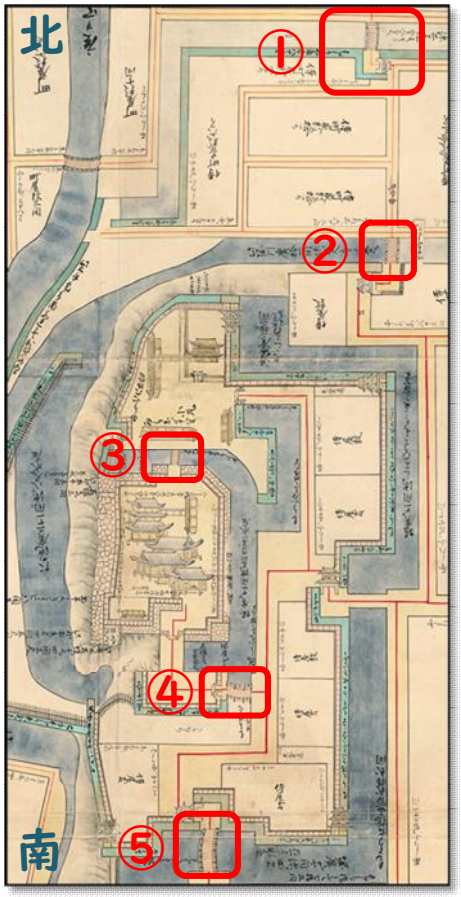
史跡 弘前城跡では、史跡内にある８橋の上部木材の更新工事を進めています。今号では、令和６年11月より工事を進めている亀甲橋（かめのこうばし）の歴史について紹介します。

1.弘前城内の橋

弘前城跡には現在、８箇所の木橋［ただし橋脚はコンクリートパイル］があり、これらは江戸時代に創架されたものと、昭和初期に新設されたものに分類されます。　※創架（そうか）⇒初めて橋を架けること。

正保２年<1645>「津軽弘前城之絵図」【図１：全体のうちの一部・弘前市立博物館所蔵】は弘前城を描いた最古の絵図とされ、①亀甲橋（かめのこうばし）、②賀田橋（よしたばし）、③鷹丘橋（たかおかばし）、④下乗橋（げじょうばし）、⑤杉の大橋（すぎのおおはし）の５橋が描かれています。

亀甲橋は外濠にかかる橋で城の最北に位置し、北の郭北門［亀甲門］前の空間と城外を結んでいます。北門は、築城当初から寛文５年〈1665〉までは城の正面玄関だったことから、亀甲橋もまた、北門とともに弘前城の表口として城内に人を迎え入れていたことになります。



【図１】正保２年「津軽弘前城之絵図」［部分］⇒

2.亀甲橋（かめのこうばし）

創架：慶長16年<1611>
改修：令和７年<2025>

亀甲橋の修理は、近いところでは昭和52年〈1977〉・平成16年〈2004〉に行われており【写真２】、今回は平成16年から21年ぶりの修理となります。当初木柱だった橋脚は昭和にコンクリートパイルに変更され、現在も昭和52年に設置されたコンクリートパイルの橋脚と鉄筋コンクリート製の主桁で橋の主体的な強度が保たれているため、自然環境下で劣化する上部木材のみを約20年ごとに更新しています。

【写真2】平成16年〈2004〉仕様の亀甲橋

3.「北外橋」から「亀甲橋」へ

「弘前藩庁日記（国日記）」等に代表される江戸時代の記録において、亀甲橋は「北外橋」「北の外橋」「大手橋」等と記述されており、当時は現在と違う名称で呼ばれていたことが分かります［史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団1984］。一方で、当時の橋の形状が分かるような史料は現段階で確認されておらず、江戸時代の「北外橋」の仕様については不明です。

【写真3】昭和7年〈1932〉頃の亀甲橋
※高橋謙吉1932『津軽名勝と産業』より転載

かつての亀甲橋の形状を伝える古い資料には、昭和７年・同15年頃の写真があります【写真３・４】。これらによると、当時の亀甲橋の高欄（欄干）は白木であったと見られ、笠木や敷板も平らな形状であったようです。また、昭和11年〈1936〉８月24日付「弘前新聞」には、秩父宮両殿下が「亀甲橋」上に設置された御席からネプタをご覧になったと記されており、この頃には「亀甲橋」の名称が定着していたことが分かります。

※笠木（かさぎ）⇒高欄最上部の横材。
※敷板（しきいた）⇒橋の歩行面。

【写真４】昭和15年〈1940〉頃の亀甲橋
※東奥日報社1940『青森県綜観』より転載

一方で、昭和52年の修理後の写真には、高欄が緑色に塗装され、笠木や敷板の上面が弧を描く太鼓橋風の亀甲橋が写っています【写真５】。この変化は昭和15年から同52年までの37年間で生じたものと考えられますが、具体的な時期や緑色にした理由等は不明です。この仕様は平成16年・令和７年の修理でも引き継がれています。

【写真5】昭和52年〈1977〉仕様の亀甲橋

なお、今まで北門側の親柱には「かめのこばし」と記されていました。「亀甲橋」の名は、北側の町名「亀甲町（かめのこうまち）」に由来するものと考えられますが、弘前城跡の整備基準時期である幕末には「亀甲町」の表記が確立していたと思われることから、令和７年の修理を機に親柱の表記も「かめのこうばし」に改めます。

【参考文献】
・史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団1984『弘前城関係資料』弘前市教育委員会社会教育課
・昭和11年8月24日付「弘前新聞」（尚武を誇るネプタ秩父宮両殿下台覧）

【発行】弘前市都市整備部公園緑地課弘前城整備活用推進室
〒036-8356 青森県弘前市大字下白銀町1番地
電話 0172-33-8739 FAX 0172-33-8799 E-mail：kouen@city.hirosaki.lg.jp